

奥積雅彦（総務省統計研究研修所教官）

統計教育に貢献した航空工学者 近藤次郎の予想

近藤 次郎 こんどう じろう

(1917-2015)

工学博士（航空工学）。昭和22年（1947年）から昭和26年まで総理庁統計局（現在の総務省統計局）と統計職員養成所（現在の統計研究研修所）に勤務。東京大学工学部の教授（昭和33年～）、学部長（昭和50年～）を歴任。昭和52年東京大学名誉教授。国立公害研究所の所長、日本学術会議の会長などを歴任。昭和33年大内賞、昭和41年デミング賞、平成2年（1990年）勲一等瑞宝章、平成14年文化勲章を受章。

【参考資料】：総務省統計局「統計調査ニュース」第200号



【画像】：前掲の「統計調査ニュース」第200号

1 はじめに

近藤次郎先生は、オペレーションズ・リサーチ、航空工学、環境科学などの分野で教育・研究に多大な業績を残されました。特に、航空工学の世界では国産旅客機YS-11の企画に携わっていたことは有名ですが、実は昭和22年（1947年）から昭和26年まで総理庁統計局と統計職員養成所に勤務されていました。統計局では、消費者物価指数の公表などに携わるとともに、統計教育の開拓と振興に尽力されました。本

稿では統計教育に係る近藤次郎先生のトピック（話題）を紹介いたします。

平成期における統計局のできごとを調べるため、たまたま「統計調査ニュース」¹を参照しようと考え、まずは、キリのよい番号のバックナンバーから閲覧したところ、その第200号（平成15年（2003年）5月刊行）に、近藤次郎先生の巻頭言と総務省第二庁舎において開催された近藤次郎先生の文化勲章受章記念講演会（演題「統計局の思い出」）の講演の概要が掲載されていました。

その際、なぜ、航空工学を専攻され、国産旅客機YS-11で有名な先生が、統計局に勤務されたのか気になったので、調べたところ、先生の寄稿「私と統計」（月刊誌「統計」昭和44年^{1969年}11月刊行に所収）に、そのヒントがありました、それによれば「私が統計を勉強するようになったのは全くの偶然である。元来、航空工学を専攻していたので敗戦で飛行機の研究、教育が禁止されていなかったら大学に残って今同様そのまま研究を続けていたことであろう。」とされ、終戦後しばらくは、敗戦で飛行機の研究、教育の仕事に従事することが禁止されていたことから、知人のすすめで統計局に勤務することとなったそうです。

2 統計教育に携わるきっかけは・・・？²

国民が統計的なものの見方・考え方を持つことの重要性については、戦後日本の統計再建のために来日したアメリカの統計使節団（団長：ライス博士）が、そのレポート（⇒【参考】）において指摘していたところですが、新潟県統計課長天野勲氏は、小学生に統計的なものの見方・考え方を教育することが重要と考え、全国に先がけて統計協力学校を誕生させました。近藤次郎先生は新潟県からの招請を受けて、統計教育の指導、具体的には、統計図表の見方、統計データをもって物事を考えることについてどのように教えるべきかの指導を行いました。そして、広島県、長崎県、宮城県などからも招請され、全国に広がっていきました。昭和33年（1958年）には、その功績がたたえられ、我が国の統計の改善・発達に貢献した人を顕彰する大内賞を受賞されました。

¹ 総務省統計局の広報紙として統計局が実施する各種統計調査など統計業務に関する動向について周知を図るとともに、統計調査の結果、統計に関する情報等を都道府県・市区町村等に紹介し、統計調査に対する理解と協力を得ることを目的として、昭和59年（1984年）10月に創刊され、昭和60年1月から毎月刊行。

・No.1～No.256：総務省統計図書館で閲覧可能

・No.257（平成20年（2008年）4月刊行）～：国立国会図書館デジタルコレクション及び総務省統計局HPで閲覧可能

2【参考資料】

・総務省統計局「統計調査ニュース」第200号

・近藤次郎「私と統計」（月刊誌「統計」昭和44年11月刊行）、国立国会図書館デジタルコレクション（※国立国会図書館/図書館・個人送信限定）で閲覧可能

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2780437/19>

【参考】アメリカ合衆国統計使節団「日本の統計組織の近代化の必要」(統計委員会事務局訳) ³

四 統計上の基本的要請を満たす方法

…日本は普通教育制度を利用して、民衆の間に統計的観念を要請すると同時に、他方において、専門的・行政的な性格をもつ有能な統計指導力を発達せしめるような措置を講じなければならない。統計教育の問題は初級・上級学校の全部に亘って同時に着手されなくてはならない。

A 初等及び中等学校教育

民主主義社会に於いては、大衆は少なくとも社会及び経済問題に対し市民として反応し且指導者はこれらを更に専門的に処理して行かなければならないから、これら社会及び経済問題の根本を理解する必要がある。これ等の問題及びその解決の可能性を、合理的に理解するためには、普通、統計的手順に依らなければならない。もし子供の時分に全社会現象の分析とその組織的な取扱の基礎となっている或根本理論を体得していれば、その人々には前記社会及び経済問題とその解決の可能性が良く理解できるであろう。統計学発達の因となった基本的な観察・概念は初歩的なものであるから、…児童にもたやすく理解できるのである。…子供に馴染みのある物の間における相異から出発して、子供は計算、測定、変数、分類、度数、分布、中心傾向、平均等に就いての抽象概念をつかむことができる。子供達は希望的観測やあて推量、不正確等から生ずる不都合に気付くことによって客観性と正確さの価値を学ぶことができる。かくして知性的に正直であることが、根本的な美德であることが吹き込まれるのである。

初等教育以上の生徒は多分これと同時に修得される算術の助けをかりて、分散、相関、確率、傾向及びその偏差等の

概念を説明し、簡単な現象をグラフで表す実習をする段階に進むことができる。

此等の概念や実習を「統計」と名づける必要はない。蓋し此等は普通教育の学校課程の中に地理とか公民とか社会科とかその他色々な余りはっきりしない名前で呼んでいるところの物理的、社会的現象の基本的な観察・説明に属するものであるからである。

3 統計は社会人の必須の常識となると予想

近藤次郎先生の著書「中・小学校における統計教育の理論と実際」(昭和27年^{1952年}7月)の総説⁴において「今や統計は独り教育方面のみならず、政治、経済、国民生活のあらゆる面に広く用いられ、**今後の社会人の必須の常識となるもの**であって、将来の新生日本の国民となる学童・生徒に統計の基本的な種子を蒔いておくことは最も望ましいことであろう。」としており、これは、70年前の昭和27年^{1952年}に統計は社会人の必須の常識となることを予想していたものであり、近藤次郎先生の先見の明を感じます。

4 おわりに

前掲の「統計調査ニュース」第200号の近藤次郎先生の巻頭言は、「忙しい中でも統計の研究に力を入れていただくよう期待しています」と締めくくっています。統計の研究は社会的利益をもたらすものであることを示唆するものと受けとめ、統計行政に携わる者へのメッセージとして心に刻まなければならないと感じました。

³ 国立国会図書館デジタルコレクション (※国立国会図書館/図書館・個人送信限定) で閲覧可能
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3023480/14>

⁴ 国立国会図書館デジタルコレクション (※国立国会図書館/図書館・個人送信限定) で閲覧可能
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9542337/11>